

複式学級における理科授業

—異学年の指導における留意点—

八田明夫 A、吉田安規良 B、橋本健夫 C

HATTA Akio, YOSHIDA Akira, HASHIMOTO Tateo

A 鹿児島大学教育学部、B 琉球大学教育学部、C 長崎大学教育学部

【キーワード】複式学級、理科授業、主体的学習習慣、複式の指導形態の留意点（A 年度 B 年度問題）

1 複式学級指導

2 学年の児童数が 16 名以下の場合に、複式学級に編成される（小学 1 年を含む時と中学校の場合は 8 名以下）。複式授業では、直接指導の学年と間接指導の学年とが、交互に発生する。間接指導の時、児童の主体的学習習慣を身につける指導が必要となる。本発表では、主に小学校における複式理科授業の課題について述べる。

2 複式学級の授業形態

複式学級の授業形態は、学年別の指導案と単式学級の指導案とに分けられる。単式学級的な指導をするためには、2 つの学年の内容を均等に A 年度 B 年度に配分して、理科指導案を作成する方法などがとられる。1 つの学年にとって内容が順行している場合は、もう一つの学年は逆行になる。この指導方式は「A 年度 B 年度」方式などと呼ばれている。

単式学級的な「A 年度 B 年度指導案」が選択される条件は、「学校や児童生徒の実態」であり「長期的な児童数の変動の無さ」である。こうした指導法の選択は、児童や学校の実態に則して選択されるべきであり、かりにも教師の都合で選択すべきではない

3 現実問題としての A 年度 B 年度案対策

(1) 転入した児童への対策

例えば A 年度 B 年度案で指導している 3 年と 4 年の複式学級に 4 年生が A 年度に転入した場合、すでに昨年 3 年の学習が終わっている児童が再び 3 年の内容を半分程度含む学習をするという事態になる。

この事態に対応して学年別の指導案に戻す場合は、4 年の在校生はまだ学習していない 3 年の内容を 3 年と受講しなければいけない。A 年度 B 年度を継続する場合は転入生に対し、昨年実施して終わっている 4 年の内容を複式的に指導しなければいけない。

(2) 転出者の場合

3 年生の時に 4 年生の内容のほぼ半分の学習が終わった児童が、単式学級の学校に転出した場合、3 年の内容のほぼ半分の学習ができなくなる。転

校先の学校が在籍していた学校から連絡を受けて、その児童に対して 3 年の未履修内容の学習という特別な指導計画を立てないといけない。

「複式学級における理科の A 年度 B 年度指導案」は少人数学級で単式学級的な指導をすることで児童の学習に成果が期待できる時に限るべきで、実施する場合は上記のような事態への配慮が欠かせない。特に転出の時は、転出先の学校へ児童の学習履歴を単元レベルで知らせないといけない。

4 学習の系統性の問題

理科の授業では、各学年の学習内容の系統性が大切である。5 年、6 年の順で学べる内容には問題がないが、6 年、5 年の順に学ぶ内容には、問題が多い。

5 年にもその分野の学習がある場合、4 年からいきなり 6 年の内容を学ぶことになるからである。結果として両学年の内容を学ぶのであるが、「学びにくさ」の問題が発生する。

物質とエネルギーの内容で 4 年の電池から 6 年の電磁石に進んでも大きな支障はないが、その他、多くの場合は学年の系統性を無視した順で指導することには無理がある。

5 年の流水の働きを学んでから 6 年の土地の作りと変化を学ぶように計画されている。逆の順番になった学年の児童への配慮は複雑で二重手間なものになる。特に 3 年と 4 年の逆転した内容の学習は児童が理解する時の混乱の元になる。

複式授業の特徴を生かして学年別の授業を実施すれば、主体的学習の習慣が身につく、学力の向上が見られることが知られている。また、教師にとっても単式学級における習熟度別授業に複式の指導法を生かすことができる。

本研究は平成 17、18 年度文部科学省特別教育研究経費措置事業「新しい時代の要請に応える離島教育の革新（長崎・鹿児島・琉球 三大学連携事業）」によるものである。